

近世～近代に生産された 石見地方の窯業製品の分布から見た日本海海運

阿部 志朗

- I. はじめに
- II. 近世～近代の石見地方の窯業製品
 - (1) 石見焼と石州瓦の共通点
 - (2) 石見焼の特徴
 - (3) 石州瓦の特徴
- III. 近世～近代の石見焼の分布と流通
 - (1) 現地調査から見た流通圏
 - (2) 『諸国御客船帳』の売買記録
- IV. 近世～近代の石州瓦の分布と流通
 - (1) 現地調査から見た流通圏
 - (2) 『諸国御客船帳』の売買記録
- V. 戦後の石見地方の窯業製品の流通
- VI. おわりに

I. はじめに

近世後半から近代にかけて、島根県西部石見地方では石見焼、石州瓦という二つの窯業製品の生産が隆盛を極めた。これらは石見地方からの主要な積荷として、いわゆる「北前船」に象徴される日本海海運で運ばれ、日本海沿岸地域を中心に国内外に広くかつ大量に流通した。

石見地方の窯業製品を取り上げた地理学的研究として、古くは戦前の雑誌『地理学』に掲載された森信美による「石見の赤瓦及粗陶器の地理学的研究」がある¹⁾。石見地方の赤瓦(石州瓦)と粗陶器(石見焼)について、おもに当時の生産の状況と工場分布の特徴につ

いて明らかにしたものである。昭和初期の汽車輸送での販路についても言及されており興味深い。瓦産業に限れば、木村辰男が大正期から戦後にかけての全国における瓦生産の集中化と産地の変容について述べている²⁾。三州瓦、淡路瓦を中心に考察されているが、石州瓦もデータに含まれるため戦前戦後の変容を大観するのに参考になる。これらの他に地理学研究で石見の窯業製品に言及されたものは筆者の若干の報告や拙稿³⁾を除けばほとんど見られない。

島根県石見地方の郷土史の文献には、鶴田真秀⁴⁾、平田正典⁵⁾、江津市文化財研究会⁶⁾などによるものがあり、文献史学や文化史的な十分な成果がある。とくに製品の歴史や製法、職人の生活、生産地での出荷体制などはすでに詳細に述べられている。しかし、製品の販路・流通を消費地からの視点で述べたものはなく、また流通圏についての記述は範囲の記述がまちまちである。

歴史学・考古学の分野では、久保智康⁷⁾が日本海域の赤瓦について、近世～近代の製品の特徴と流通について論じていているが、越前系赤瓦に関する記述が中心で石州系赤瓦については若干触れられている程度である。2013～2015年度にかけて島根県古代文化センターがテーマ研究事業「近世・近代の石見焼の研究」を実施し、同名の報告書にまとめられた⁸⁾。これまでの県や市町村などによる

キーワード：石見焼、はんど、刻印、石州瓦、客船帳

窯跡の発掘調査に近世・近代考古学的な新たな成果を取り入れ、文献史学や科学的な分析も加味し石見焼（石州瓦も含む）の歴史研究に新しい成果がもたらされた。ただし、近世～近代の流通圏の把握については十分なされていない⁹⁾。その調査にも携わった榎原博英は、他産地の出土品との比較、登り窯と窯道具の比較を通し、石見焼の特徴と成立について端的に論じているが、これも流通については拙稿の引用に終わり、詳細については述べられていない⁹⁾。

以上のことから、本報告では従来石見地方の窯業製品に関する研究で取り上げられることが少なかった日本海沿岸地域の製品の分布・現存状況について、消費地の現地調査をもとに、海からの物流が沿岸地域から次第に内陸地域へと広がり、さらに生活圏の拡大とともに海外にも拡散していった様子を捉える。消費地に海からもたらされた石見の窯業製品と人々の生活との関係を考察するとともに、生活物資の流通を通して近世～近代の日本海海運の果たした役割を検討することを目的とする。

製品の分布・現存状況について、石見焼についてはおもに各地の資料館・博物館、国や地方自治体の文化財に登録されている商家や農家などの伝統的家屋とその周辺市街地などを訪問し現地で確認した。これらの施設、家屋にあるものは由緒がわかることが多いからである。

また、石州瓦についてはweb上の伝統的建築物の「瓦」に関する画像や、インターネット上のカラーの空中写真（地理院地図、Google Map等）で見当をつけ、現地調査で目視によって確認した。それぞれの製品の、とくに近世～近代に生産されたものを他産地の陶器や瓦と見分ける特徴については後述する。

II. 近世～近代の石見地方の窯業製品

(1) 石見焼と石州瓦の共通点

石見焼と石州瓦は、現在も島根県西部石見

地方を代表する地場産業である。石見焼は経済産業省の伝統的工艺品に指定されている陶器、また石州瓦は愛知県の三州瓦に次ぎ全国第2位のシェアの陶器瓦である。ともに同じ陶土、釉薬（ゆうやく・うわぐすり）を原料に用いる。同じ原料を使い、ほぼ同じ品質の陶器と瓦が同一地域内で現在まで生産されているのは、国内では他にあまり例を見ない。

共通の材料となる陶土は、島根県大田市から益田市に至る地域のやや内陸部に海岸線にほぼ平行に分布する「都野津層」と呼ばれる粘土である。およそ300万～100万年前の堆積層で、色はクリーム色。1300℃を超える高温焼成に耐えられる。一般にいわゆる焼物（粘土瓦、タイルを含む）は、粘土を使い焼成温度が800℃程度の土器、同じく粘土を1100℃程度で焼成する陶器、陶石の粉を使い1300℃以上の高温で焼成する磁器に大別される。粘土は高温で焼くと堅くなるが、温度を上げすぎると逆にひび割れたりする。都野津層の粘土は1300℃近くの高温でようやく堅く焼き締まり、吸水性も低くなるという特徴がある¹⁰⁾。

石見焼・石州瓦はともに独特の光沢のある赤茶色の製品が特徴的である。色のもととなる釉薬には、出雲地方の宍道湖南岸に分布する凝灰岩質砂岩の来待石きまちの粉、通称「来待粉」を用いる。この石粉を水に溶き、日干しまたは素焼きの陶器に塗り焼くと、これも約1300℃の高温で陶器の表面がガラス質を含む光沢のある赤茶色になる¹¹⁾。

粘土（陶土）を使うけれど、磁器と同様の1300℃以上の高温で焼成される石見の焼物・瓦は、陶器でも磁器でもない「炆器（せつき）」に分類されることもある。しかし「炆器」には備前焼や常滑焼のように釉薬を使わず高温で焼かれるものが多い。施釉された粘土を高温で焼成すること、それ自体が石見地方の窯業製品の他に異なる特徴である。高温焼成で堅くなる事に加え、独特の釉薬により

表面がガラス質になることで、丈夫で割れにくく耐酸性、耐塩性、耐寒性に富む品質となった。これが遠隔地の沿岸部および寒冷地に普及する要因の一つとなったとされる。

石見焼・石州瓦の起源は、実は定かではない。石見の窯業の起源について頻繁に引用される1916(大正5)年刊の『那賀郡誌』には次のように書かれている¹²⁾。

「…(前略)…今各町村に於ける沿革として傳ふるものを擧ぐれば左の如し。

寶曆十三年四月 江津村森田某といふもの
周防國岩國藩の人入江六郎より製陶法
を傳習す。

天明年中 備前國より一人の職工江津村に
来り粗陶器を製造す。

寛政三年 白石平左衛門川波村字一貫淵に
於て工場を起す。

文化年中 松平周防守康任の家老某、濱田
町字外の浦及び動木の二箇所に工場を
設け、摺鉢、捏鉢、片口、雪平、徳
利、皿、茶碗等を製造せしむ。

弘化二年 都濃村大字嘉久志の人山形廣十
郎工場を設く、之を山木屋丸物場と稱
す。」

すなわち、18世紀後半に幕府直轄石見銀山領内の江津周辺で始まり、江戸末期には次第に周辺に広がったことが書かれている。これをもとに郷土史の文献では、石見の焼物は周防国を経由した唐津焼などの九州系の製陶法と、備前焼の製法が合わさって生まれたとされてきた。さらに丈夫な品質の焼物の評判が、もともと城下町や銀山町で黒や灰色のいぶし瓦を生産していた瓦業者にも伝わり、瓦にも同じ土と釉薬を使う赤瓦が広まった¹³⁾というのが定説であった。このことについて先述の島根県古代文化センターの研究でも様々な面から検討された。しかし製法、道具等において、肥前、備前いずれの地域からも直接的な影響は見られず、焼物と瓦とどちらが先に来待石を釉薬として用いたかについて

も結論を得ず、現在の石見焼・石州瓦の起源は判然としていない。

近世～近代の石見地方の窯業の工場(窯)は、沿岸部または沿岸に近い内陸部におもに立地した。これは、陶土の都野津層の粘土が沿岸に近い地域に分布している自然的な条件に加え、日本海の海上交通(船)による出荷に好都合であるという社会的条件がある。また、石見地方はその名が象徴するように山がちで平野が少なく、海岸からすぐ傾斜地となるため、沿岸部に登り窯を設置するのに適している。明治以降増加した石見地方の窯場は昭和初期には100以上を超えたという¹⁴⁾。その多くが沿岸に近い地域に立地していた。明治時代の石見地方の商工業を描いた銅版画集¹⁵⁾には、江津の二か所の焼物の窯が描かれている。ともに日本海(または江の川)に面し、職人による作陶や登り窯での焼成の様子とともに、窯場附近に停泊し出荷に備えている帆船(和船)の姿がある(図1)。瓦工場も沿岸部に多かった。石見の窯業は海からの出荷に適する立地であったことがわかる。

(2) 石見焼の特徴

石見地方の窯業製品の一つ、石見焼の最も大きな特徴は、成立期から現在まで一貫して手仕事による「粗陶器」の生産に終始していることである。祖陶器とは水甕、蓋つき壺、片口、こね鉢、すり鉢などの日用品のことを指す。また、四角い瓦に対して丸い形の器が多いので、石見地方では「丸物」と総称された。職人も「丸物師」とも呼ばれていた。来待粉を釉薬に使った赤茶色の「赤もの」と、石見地方の長石やケイ石を釉薬にした白い「白もの」とがあるが、装飾はほとんど無く、赤ものには黒、白ものには青の「掛け流し」と呼ばれる模様が入る程度で、絵付けされたものはほとんど見られない。高級品として各地の資産家のみが収集しているような貴重品ではなく、一般の庶民の生活物資として

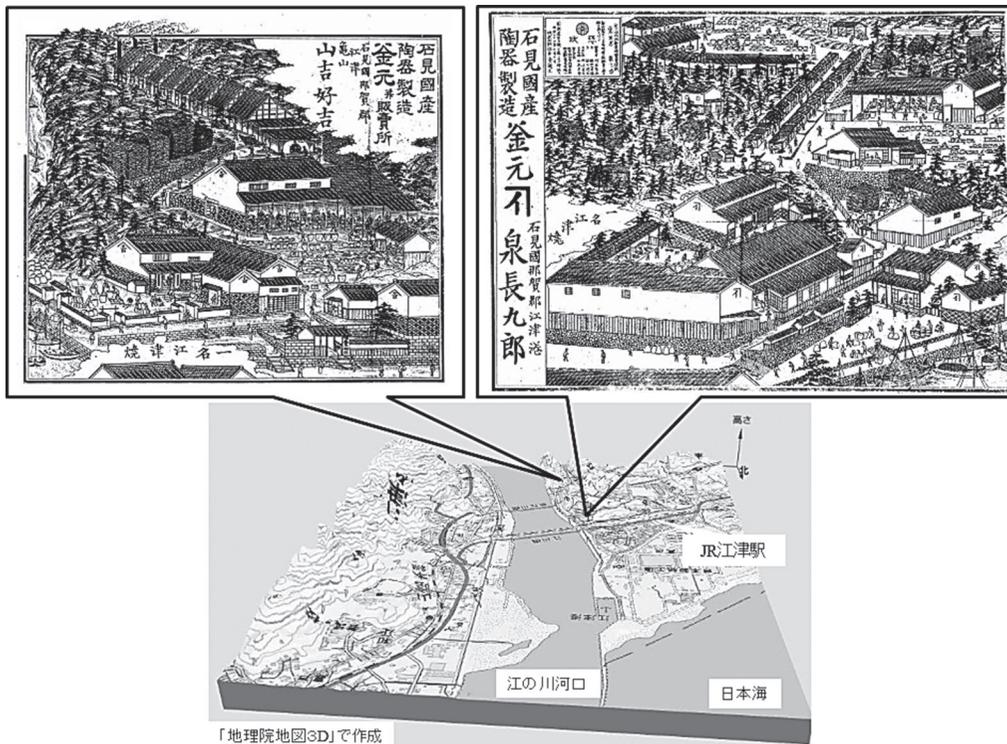


図1 明治時代の石見地方の陶器生産風景と窯（工場）の立地

中谷与助『石見国商工便覧』（1894（明治27）年）より

注）右上図は現在のJR江津駅の位置にあった泉窯。鉄道工事のための立ち退きをきっかけに1916（大正5）年に廃業。
左上図は江津本町地区にあった山吉窯。鉄道工事のため移転。当時の生産の様子とともに出荷を待つ帆船が描かれている。

大量に消費地に流通した。

最も代表的な製品は「はんど」または「はんどう」¹⁶⁾と呼ばれる大型の甕で、石見焼の代名詞ともいえる。2斗～5斗のサイズがほとんどで、各地で上水道が普及するまでは台所に置かれ水甕として用いられることが最も多かった。肥料となる堆肥を貯めるために畑に埋めて使われているものもいまだに各地で散見される。備前、唐津、信楽、常滑、益子、大谷（徳島）など他の陶器産地でもこのサイズの甕が作られることは多いが、石見焼のはんどには、

- ① 寸胴の形状
- ② 「しのづくり」¹⁷⁾ 特有の2～3段の継ぎ目

- ③ 肩（口の部分から少し下）の部分の櫛目の「すじ」¹⁸⁾

- ④ 高台のない底面

- ⑤ 内側にも施釉

- ⑥ 底に印された刻印や墨字、スタンプ

などの特徴があり、これらで他産地のものと見分けられる（図2）。

とくに③の「すじ」は石見焼のはんどには現在でも必ずある模様。また⑥の「石見」「石見焼」「イワミ」などの刻印、墨字、スタンプは、はんどだけでなく、壺や摺鉢などの小型の製品にも印されていることがある。

出荷用の製品の梱包方法にも、他産地の陶器と石見焼とは大きな違いがある。国内及びアジアのワラによる陶磁器の梱包方法を調査

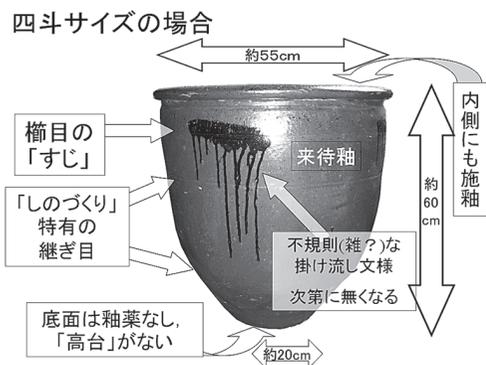


図2 石見焼の代表的製品「はんど」の特徴

研究した宮木慧子の『陶磁器ワラ包装技術の文化史』によれば、石見焼の梱包は「菰包み」といい、一番外側の甕（はんど）の中にそれぞれ菰に包んだ小型の甕、壺さらに片口や摺鉢などを入れ子状に収納していく方法である¹⁹⁾。多種類の陶器を一括で梱包するのは他に類を見ない。この梱包単位を「一丸」と呼び、近代の統計書などでも「丸」単位で集計されることがある。中身は何種類もの組み合わせがあり、壱号（一号）から十何号まで「〇号」というセットの名称があった。消費地で開封しなくても中身に何が入っているかわかるように、窯（工場）で梱包した後ひっくり返し底面に墨で「〇斗 〇号」と記した（以下、〇はともに任意の数字）。「〇斗」は一番外側の甕のサイズを示す。「北前船」など船内の限られたスペースを用いた海からの出荷に特化した梱包・輸送方法であった。底面の「〇斗 〇号」の墨書の習慣は他産地の製品には見られない特色であり、鉄道貨物の時代になっても引き継がれている（図3）。したがって石見焼を判別する目印の一つではあるが、これで生産時期までを判断することは難しい。

はんどの形状は石見焼の成立期から次第に変化している。江戸末期のものは九州系の甕のように口の部分が広がり、首の部分がやや



図3 菰包みの名残がある現在の石見焼の梱包

長く窄まった形状である。時代とともに寸胴の形に変わり、作陶技術の向上もあって「しのづくり」の継ぎ目も減り滑らかになる。色も古いものは光沢が少なく黒っぽくくすんだ印象があるが、釉薬の改良も進み、次第に光沢が増し茶色が鮮やかになり、戦後になると黒い掛け流し文様がないものも増える。

中には底面に墨字で、窯印と甕のサイズに加えて菰包みを示す「一丸」の中身が列挙されているものがある。これは初期の形状のはんどにのみ見られ、時代が下ると「〇号」のみの記載に簡略化する。菰包みが各地に次第に浸透し、消費地でも「〇号」記載のみで梱包の中身がわかるようになったためと推測できる。墨字と形状とを組み合わせると「〇斗 〇号」の記載の簡略化に合わせるように甕の形も寸胴になり、外側の色も鮮やかになっていく。さらに、重量で運賃が決まる鉄道貨物の時代になると入れ子状の梱包の必要性が薄れ「〇号」の記載も廃れる。

底面に「石見焼」の刻印が押された製品もある。1903（明治36）年に石見焼陶器製造業組合が発足し、それまで温泉津焼、江津焼、下府焼など個別の産地の地名で呼ばれていた

ものが、「石見焼」というブランド名に統一されたのに合わせてできた刻印で、戦前に産業界が業種別に統制されるまで続いた。はんどだけでなく、小型の壺やこね鉢、すり鉢などにもみられるが、生産地の石見地方には刻印の押された製品はほとんど見つからない。おもに出荷向けとして生産された製品と判断できる。石見地方は鉄道敷設が大正末期なので、1903年以降のこの刻印がある石見焼は鉄道敷設以前に海から消費地にもたらされた製品である可能性が高い。

戦前～戦後には「石見」あるいは「イワミ」と書かれている検印スタンプも登場した。石見焼であることは断定でき、横書き文字の左右の向きで新旧の違いはわかるが、現在はすでに使用されており記録もないため、使用されていた時期、範囲など詳細は不明である。

上述のように、「はんど」については石見焼と判断できるだけでなく、大まかな生産時期についてもわかる特徴がある。小型の壺や片口、摺鉢などは他の陶器産地でも同様のものが作られているので、刻印やスタンプのあるもの以外は石見焼と断定することは容易ではない。

(3) 石州瓦の特徴

石見地方のもう一つの窯業製品の石州瓦は、形状でこれを他産地の瓦と区別するのは難しい。しかし、石見焼と同じ陶土と釉薬を使用していることに加え、近代以前の製品にはいくつかの特徴が見られる(図4)。

石州瓦の表面は来待粉を施釉した光沢のある茶色であるが、裏面には釉薬を塗らず、陶土がむき出しなのが特徴である。陶土として用いる都野津層の粘土は、焼成しても色に変化せずクリーム色であるので、下から見上げて瓦の裏が見られれば、屋根の上にあっても石州瓦と判別が可能である。また石州瓦は赤瓦で有名であるが、北陸以北の日本海沿岸は

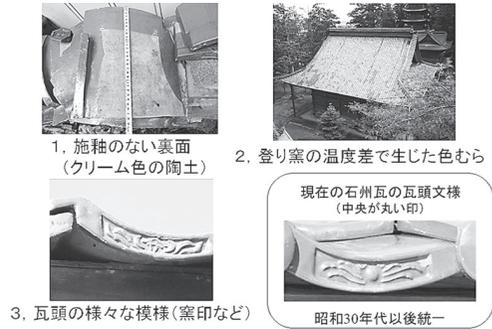


図4 近世・近代の石州瓦の特徴

他にも越前、加賀、越後など別の赤瓦の産地がある。他産地の赤瓦は瓦の表裏全体に釉薬を施すことで吸水性を抑え耐寒性を生んでいる。石州瓦は高温焼成のため施釉がなくても瓦素地(焼成した陶土)自体の吸水性が少ないことが、島根県産業技術センター浜田技術センターなどの研究で明らかになっている²⁰⁾。裏面の施釉がないことは石州瓦の機能面での大きな特徴を表している。

来待石の釉薬の「来待粉」は焼成温度が低いと色が黒くなり、表面の光沢も出ない。現在は温度調節が容易なガス釜や電気釜が使われ均質な製品ができるが、温度調節が難しい登り窯の時代には窯の中の温度差で微妙な色むらが生じた。屋根全面に石州瓦が葺かれている場合、色むらのある屋根も近代以前に登り窯で作られた瓦であることを判断する材料の一つとなる。

さらに、近代以前は瓦もすべて手作業で作られていた。他産地の瓦であれば刻印や裏面に印がある場合もあるが、石州瓦にはこうした特徴は見られない。その代わり石州瓦の場合、屋根の最前面(最下部)の「瓦頭」と呼ばれる部分の瓦には、窯(工場)ごとに異なる模様(瓦頭文様)が施されていた。中にはカタカナを含む工場の窯印が真ん中にデザイン化されている模様もあり、他産地の瓦にはあまり見られない。焼物と瓦が同じ窯で作ら

れた場合、石見焼の刻印と石州瓦の瓦頭の印が同じものもある。同じ瓦頭文様を辿れば同じ工場で作られた同時期の石州瓦を探ることができる。

寺社などに石州瓦が使われている場合、屋根の最上部の両側にある大型の鬼瓦に、作った職人による「へら書き」が刻まれていることもある。屋根の葺き替えで近代以前の石州瓦が降ろされている場合、鬼瓦に石見地方の住所の工場と職人の名前、制作年などを見ることができる。

現在でも手仕事で作られる石見焼と異なり、昭和30年代には石見地方では石州瓦工場の機械化と産地全体での瓦品質の均質化が進み、瓦頭文様も統一され大量生産へと変化した。製品の変化が連続的である石見焼と比べ、石州瓦の方が近代以前（少なくとも昭和20年代以前）の製品と現在の製品との違いは判別しやすい。

Ⅲ. 近世～近代の石見焼の分布と流通

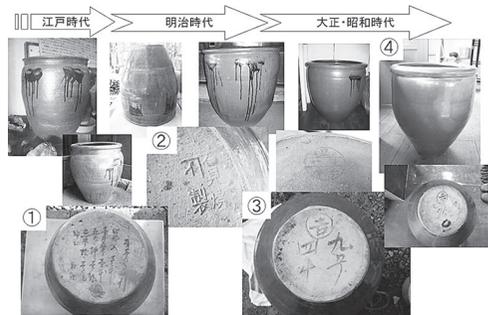
(1) 現地調査から見た流通圏

2008年から現在までの約10年間に、石見地方を除く北はロシア・サハリン州から南は九州に至るおもに日本海沿岸地域を中心に石見焼の現存調査を行った。先述のように資料館・博物館、伝統的家屋を中心に多くの場所で新旧の石見焼の現存が確認できた(表1)²¹⁾。

各地の石見焼はおもに「はんど」に見られる墨字と刻印を手がかりに図5のように分類できる。

島根県石見地方における鉄道の敷設時期は概ね大正末期である。図5の①または②の特徴(墨字、刻印)のある石見焼は、日本海海運によって海から各地に運ばれた可能性が高い。

①のように底面に内容列記の墨字がある石見焼の例を図6に示す。この石見焼は新潟県柏崎市南郊の豪農邸に保存されている。窯印は先述図1の銅版画の江津・泉窯のものであ



- ① 「菰包み」の内容列記の墨字がある江戸末から明治時代の石見焼
- ② 「石見焼」「石見」の刻印がある明治36年から戦前までにつくられた石見焼
- ③ 「〇斗 〇号」の墨字があり、明治時代～戦前～戦後のいずれかの時期につくられた石見焼
- ④ 刻印、墨字などの明確な判断基準はないが、他と違う特徴を有する新しい石見焼

図5 石見焼の水甕「はんど」の変化

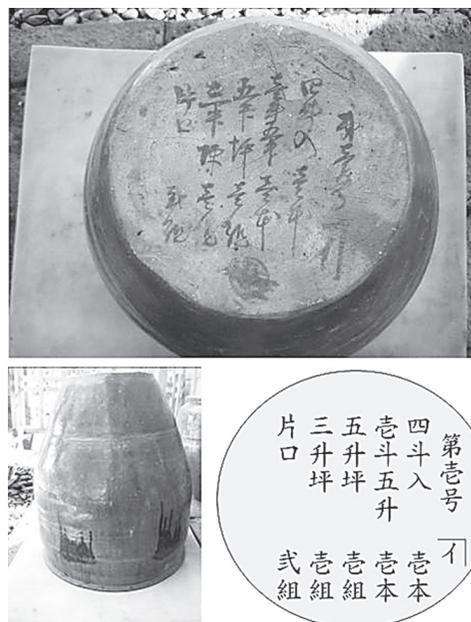


図6 新潟県柏崎市の豪農屋敷にある石見焼
2009年 貞観園(柏崎市)にて撮影。

る。この墨字は、写真の甕(はんど)のサイズが四斗で、その中に壺斗五升の小型の甕、五升の坪(壺)、三升の壺が一つずつ、さらに片口が二つ入っている「第壺号」という名前

のセットという意味になる。

図7は底面に墨字で内容が列挙された石見焼の分布である。江戸末～明治頃にすでに石見焼の流通が近畿から北陸、東北の日本海側、さらに北海道や秋田の内陸や長野にまで及んでいたことを示している。秋田、長野の内陸はそれぞれ雄物川、千曲川(信濃川)²²⁾の河川交通が盛んだったので、海からの物流が川を経由して内陸の人々の生活に影響を及ぼしていたことを石見焼の分布が物語る。同様に考えると、まだ未調査である最上川を遡る内陸部などにも、古い石見焼が流通していた可能性がある。

次に海からもたらされた可能性の強いのは「石見焼」「石見」の刻印がある石見焼である。この刻印は1903年に始まったので、石見地方で鉄道が開通した大正時代末期より以前から作られ、船で運ばれた製品の目印である。

墨字や刻印の石見焼は、生産地の石見地方にはほとんどない。遠隔地の消費地への出荷向けの製品だったためだろうが、産地の文献にもほとんど言及されていなかった。これまでの消費地での調査によって存在が明らかになり、20種類以上の刻印を石見地方以外の地域で見つけることができた。はんどなどの大型の製品に押された3cm×5cmサイズの刻印だけでなく、摺鉢などの小さい製品にも1cm×3cm程度の小型の刻印が押されていることが分かった。

これらの分布を示したのが図8である。図7の墨字の嚢に比べるとより広範囲に分布することが分かる。北海道の道東や東北の太平洋側、四国・九州にも「石見焼」が広まり、さらにロシア・サハリン州(旧：南樺太)、韓国・鬱陵島などにも刻印のある石見焼がある。戦前の日本の生活圏の拡大とともに、庶

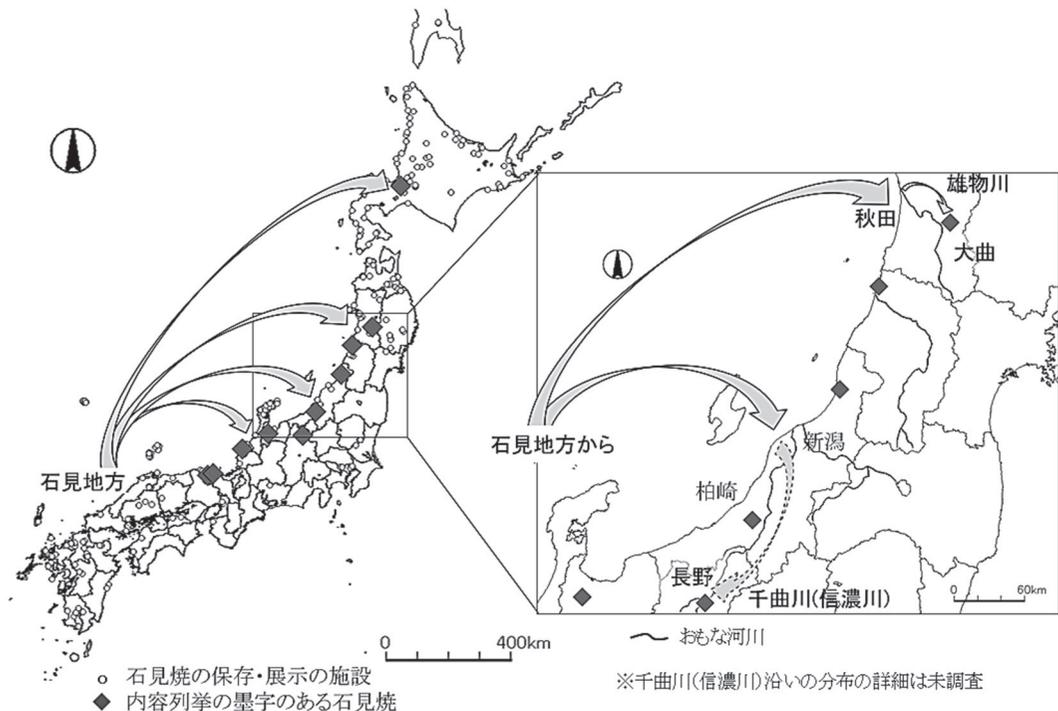


図7 「菰包み」の内容列挙の墨字がある明治時代の石見焼の分布

現地調査をもとに作成。

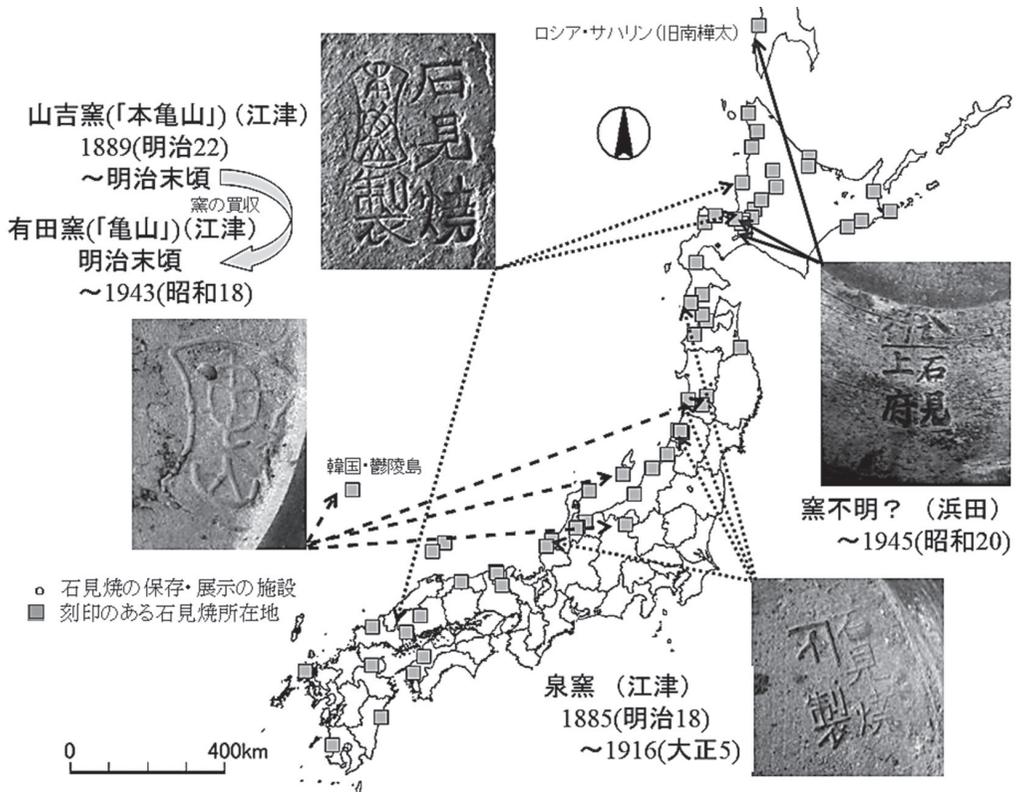


図8 「石見焼」の刻印のある製品の分布と、同じ刻印のある場所の例
現地調査をもとに作成。

民のレベルでも日本海海運による物流が活発になり、石見焼が海から浸透していったことがわかる。

図8中の泉窯は、図1、図6で先掲の工場、操業期間は僅か30年ほどであるが、その製品は北陸・東北から北海道まで一気に流通した。山吉窯も図1に掲載した窯で、鉄道(旧国鉄三江線)工事で移転後、有田窯に買収され、窯印も「本亀山」から「亀山」に変わったが、これも北海道から佐渡、瀬戸内海の宮島、さらに韓国・鬱陵島まで分布している。浜田市の地名「下府」の刻印は、北海道とサハリンで確認した。産地の文献には記録がなく、現存しない窯であるが、製品がサハリン(旧：南満州)にあるということから、少なくとも終戦までは浜田市内に存在してい

た窯の製品であることが推定される。

これまでの調査の範囲では、東海～関東～南東北の地域で、海から運ばれた墨字や刻印のある古い石見焼の確認には至っていない。

近世末～近代の日本海海運による物流が及んだ範囲やその拡散は、石見焼の分布で伺い知ることができる。

(2) 『諸国御客船帳』の売買記録

海から各地に運ばれた石見焼の売買にはどのような特徴があったのか。浜田・外ノ浦湊の廻船問屋の記録帳『諸国御客船帳』を使って明らかにする。

諸国御客船帳(または客船帳)は、近世～近代の全国各地の主要な湊には、かなり残っているが、浜田の客船帳は商品取引の品目ま

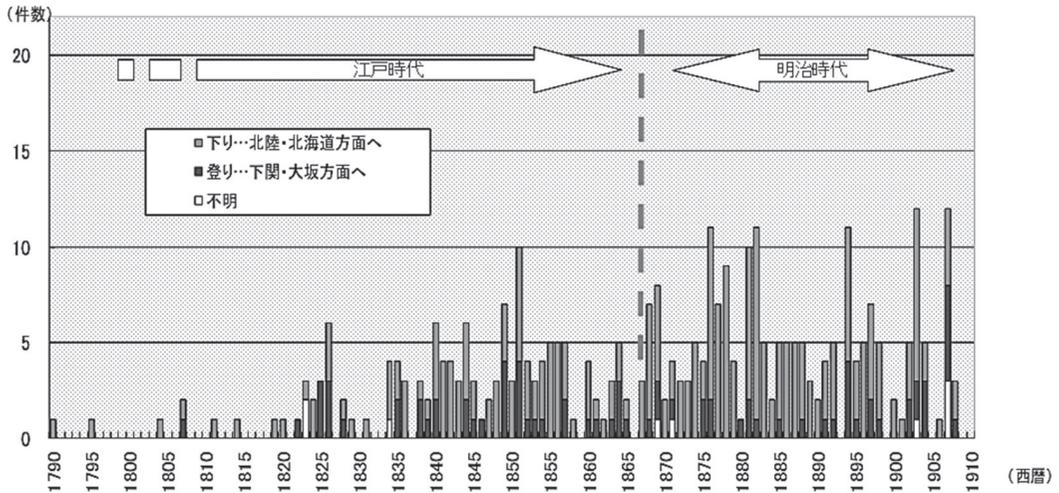


図9 浜田外ノ浦湊における上下方面別「焼物」取引記載件数

浜田外浦米屋「諸国御客船帳」(『近代海運史料』 柚木：1992) および
 浜田外浦清水屋「諸国御客船帳」(『諸国御客船帳 上・下巻』 柚木：1977) より作成。

で細かく記録されており、情報量が多いのが特徴である。とくに、外ノ浦湊の2種類の客船帳は、翻刻され出版されており²³⁾、使用価値も高い。

この中から、いわゆる「北前船」が浜田から焼物を売買した記載件数を年代別に集計したのが図9である。

石見の窯業製品の始まりとされている1800年頃から次第に増え始め、明治時代になって急増する。客船帳には出帆時の「登り(下関、大坂方面)」と「下り(北陸、北海道方面)」の別も記されており、浜田からは石見焼が江戸末期から下り荷として買積された記載が多いことが分かる。

図10は、図9で「焼物」を買積した下り船について、船籍別に集計したものである。近畿～北陸船籍の船による取引が多く記載されている。

現地調査での実感として、また先の表1や図7でも明らかなように、現存する古い石見焼は、北海道や東北の日本海側の地域で卓越している。これらの消費地では、石見焼が「越前焼」など北陸の製品だと誤解されてい

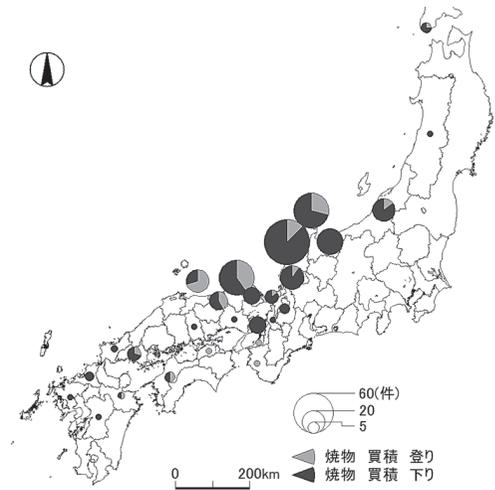


図10 浜田外ノ浦湊における船籍別「焼物」買積記載件数

図9と同じ

ることがしばしばある。北陸船籍の北前船が運んできた生活必需品の陶器なので、「海から来た北陸の焼物」との認識が生じたのも納得できる。

日本海沿岸地域に分布する近世～近代の石見焼は、おもに北陸船籍の北前船などの日本

海海運で海からもたらされた生活必需品で、寄港地から次第に後背地に広がっていった。石見焼は日本海海運と沿岸地域の庶民の生活との結びつきを示す指標の一つとなり得るといえる。

IV. 近世～近代の石州瓦の分布と流通

(1) 現地調査から見た流通圏

各地で石見焼の有無を調査している際、周辺の家屋の屋根を見上げると、同じ陶土、同じ光沢の赤瓦も見つけることがある。そこで2013年頃から石見焼と並行して石州瓦の分布も調査をはじめた。近代の石見焼が現存しているおもな施設、場所についてまとめると図11のようになる。

近世・近代の石州瓦のうち、まず間違いなく石見地方産だと分かるものは、瓦屋根の両

側の鬼瓦などに職人が書いたへら書きが残っているものである。

北海道松前町で、1875(明治8)年に創立した道内最古の松城小学校の屋根には石州瓦の赤瓦が使われていた。松前城資料館にこのときの鬼瓦が保存されており、左右の鬼瓦の内側に「明治九年三月石見国那賀郡」「浜田城下生湯住瓦師 埜勝蔵」とそれぞれ明記されている。

山形県鶴岡市のやや内陸部にある大山地区の専念寺本堂の縁の下に残る赤瓦には「昭和七年石見国生湯浜天下瓦工場製焼細工人川上長太」のへら書きがある。石見地方西部で鉄道が敷設された大正10年代から間がない時期であり、海からもたらされたものとみられる。

これらは、建物が取り壊されたり、瓦が葺き替えられたりした際に、偶然保存しておか

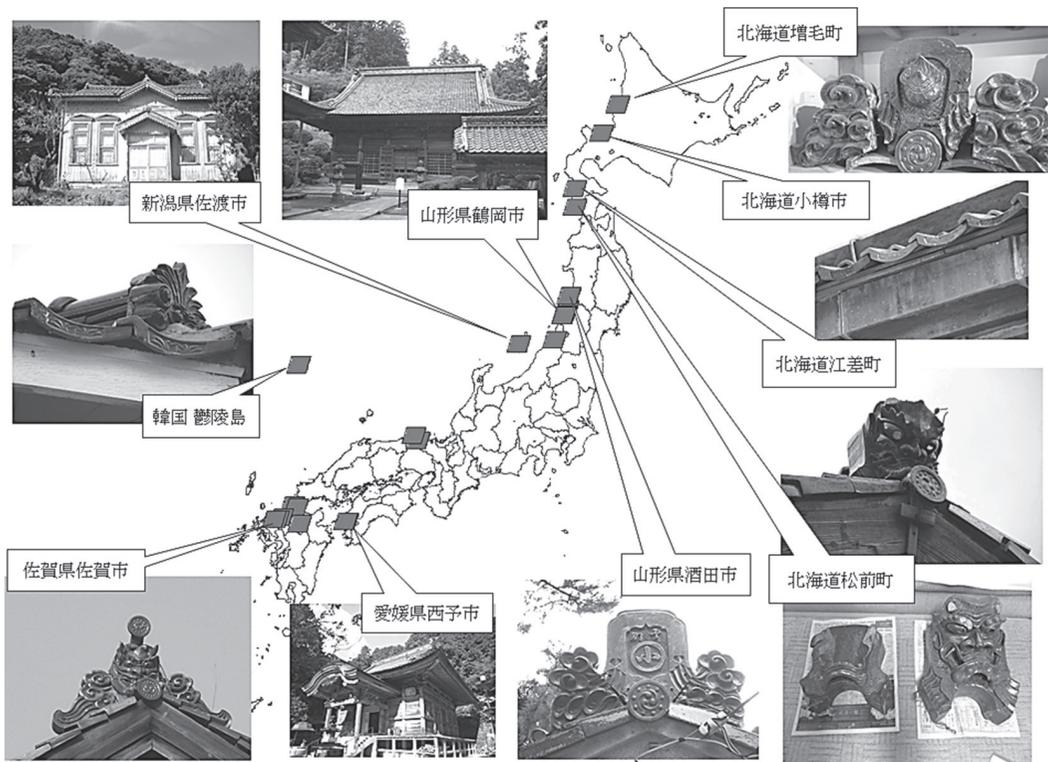


図11 現存するおもな近世～近代の「石州瓦」の分布
現地調査をもとに作成。

れていたもので、貴重な事例である。

また、瓦頭の部分の模様が窯(工場)ごとに様々に異なるのも近代の石州瓦の特徴である。カタカナの窯印(商標)がデザイン化されている瓦頭は、佐渡島、隠岐島、韓国・鬱陵島などで散見される。

同じ瓦頭文様を辿ることで、近代石州瓦の流通圏の広さが分かる。北海道増毛町の丸一本間家で保存されている石州瓦の瓦頭文様は、中央に⊕のような記号があらわれた唐草文様であるが、これは世界遺産にもなっている温泉津湊で作られ、温泉津の街並みに多く見られる石州瓦である。同じ瓦は、北前船寄港地の湊町であったが周囲の潟湖が砂で埋まり、現在は内陸にある新潟県村上市海老江地区でも見つけることができた。

最近解体されたとの情報が残念だが、小樽市の中心部に石州瓦があった。小樽は北海道としては瓦屋根が多いが、大部分は黒い能登瓦である。数は少ないものの石州赤瓦の家屋も混在していた。小樽の瓦と同じ瓦頭の石州瓦は、九州背振山地山中にある複数の集落や愛媛県西予市の四国八十八か所札所の一つ明石寺などにもある。さらに明石寺にある別の瓦頭文様の石州瓦は北海道江差町の古い蔵の

屋根などで見られる。これらはいずれも浜田市内の明治～大正期の建築物の屋根(寺社や商店)に多く見られる石州瓦である。すでに瓦工場はなく、作られた年代も生産地では不明であるが、明石寺の由緒から明治20年代に建てられた堂宇に使われているので、消費地の情報から逆にこれらの瓦が概ね明治20年代頃のものだと推察することができる。そしてこれらも石見地方の鉄道敷設前、すなわち北前船などの日本海海運が物流の中心だった時代に、積荷として運ばれ海からもたらされた瓦であることが分かる。

山形県鶴岡市の古刹善寶寺の境内の五百羅漢堂は、北前船で財をなした北海道松前の二人の商人が1855(安政2)年に寄進したものである。この屋根が石州瓦で葺かれている。善寶寺の周辺に古い石州瓦の家屋が散見されるが、寺の檀家が寺と同じ建材を使用したからだと伝わっている。まさに日本海海運と石見地方の窯業製品との密接な関係を象徴している事例である。

(2)『諸国御客船帳』の売買記録

石見焼と同様、浜田外ノ浦湊の客船帳から瓦の取引記載を取り出すと図12になる。

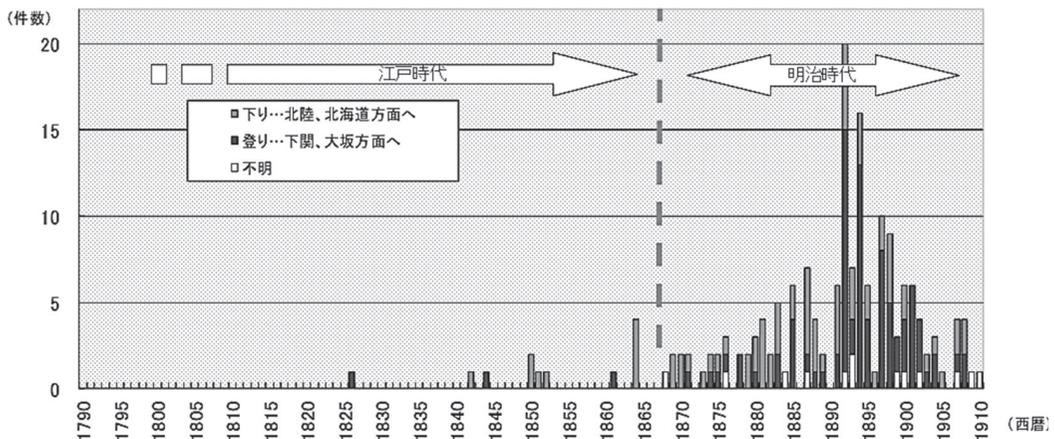


図12 浜田外ノ浦湊における上下方面別「瓦」取引記載件数

図9と同じ

図9と比べてみると、同じ産地で作られた石見焼と石州瓦の流通(売買)が全く異なる様相を呈していることが分かる。瓦は江戸時代の取引記録はほとんどない。江戸時代は基本的には庶民の瓦葺きは禁じられていたので、瓦の需要は城と城下町、寺社や資産家宅に限られるからだ。明治時代に入り、庶民の瓦への屋根替えが増え、一気に石見地方での瓦の買積が増加する。

また、焼物は下り船の買積が多かったのに対し、瓦は登り下り同じか、やや登り船による買積が多いのが流通の特徴である。図13で船籍別に買積件数を見ると、取引が最も多いのは伯耆の船で、因幡、但馬、出雲など山陰の船が多い。瓦は割れやすいので、「北前船」のような遠距離の廻船では、途中で割れて使えない。比較的近距离の消費地への取引が多かったと推測できる。近畿以西の日本海沿岸の赤瓦景観はこうして海から形成されたものである²⁴⁾。

また、面的に流通圏が拡大した焼物と異なり、石州瓦は日本海海運の重要な港湾にある寺社や銀行、学校、周辺の資産家宅などに使

われ点在している。遠隔地までもたらされた石州瓦は、いわば当時のステータスシンボルとして流通した製品のひとつだったといえる。

V. 戦後の石見地方の窯業製品の流通

北前船からのなどの船に依存していた日本海沿岸地域の物流は、近代以降鉄道の敷設により、急速にその使命を終えた、と言われることがある。しかし、石見地方の窯業製品の流通に限って言えば、必ずしもそうとは言い切れない。

図14は、戦後、鉄道貨物における島根県からの陶磁器と瓦の出荷量を示す。

戦後の島根県からの陶磁器の出荷先は、西日本が多いが、北陸、東北の日本海側も多く、北海道への出荷量が最も多い。この図からは北前船の時代の日本海海運の物流の影響がそのまま残っているように見える。戦後の水道の普及とプラスチックの登場などの影響を受け、1960年代後半から出荷量は激減するが、1960年代まで石見焼は北前船の時代に引き続き鉄道貨物で各地へ運ばれた。表1のように各地に現存する石見焼は、比較的新しいものも多く、それらはこのように鉄道で運ばれたものであった。

一方、瓦についてみると戦後、西日本への出荷が圧倒的に多い。鉄道統計では「煉瓦および瓦」で集計されているが、島根県内での戦後の煉瓦生産はほとんど見られなかったため、この数値の大部分は瓦の出荷と見なされる。一貫して手仕事に終始した陶器が出荷量を減らしたのに対し、高度成長期の中、機械化・オートメーション化を進め、建築ブームにも後押しされた石見の瓦産業は徐々に出荷量を伸ばし、京阪神、山陽地域の都市化の進展とも相まって、やがて三州瓦、淡路瓦に次ぐ全国3位のシェアを獲得するまでに成長する。しかし戦後の瓦の流通の傾向も、やはり戦前までの登り船で近距离に運ばれたという石州瓦の海からの取引傾向が引き継がれてい

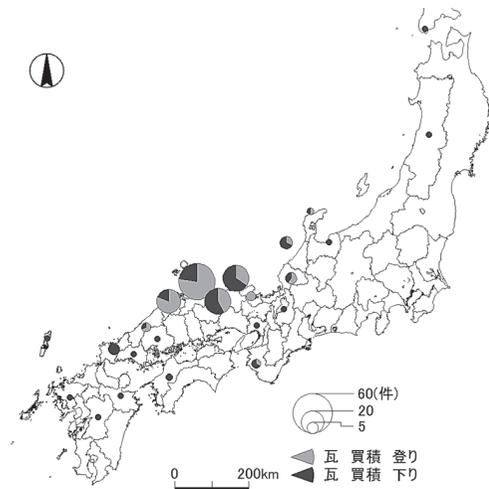


図13 浜田外ノ浦湊における船籍別「瓦」買積記載件数

図9と同じ

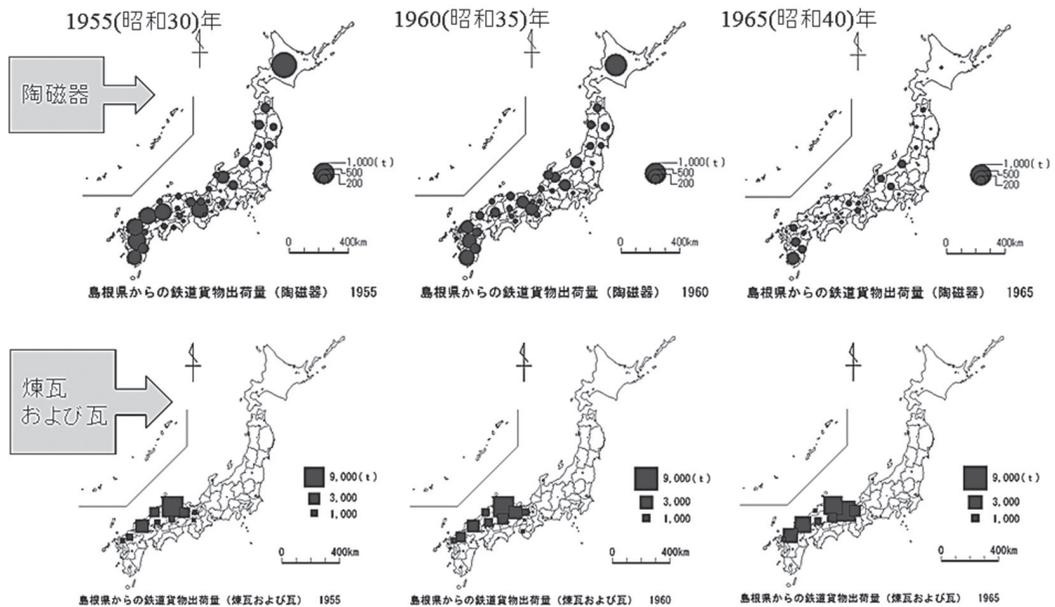


図14 戦後の島根県からの鉄道貨物出荷量の変化（陶磁器、煉瓦及び瓦）

〔国鉄鉄道貨物統計〕日本国有鉄道管理部審査統計課（経理局審査統計課・事務管理統計局）資料より作成。

ると言えるだろう。

石見地方の窯業製品の流通を見る限り、近世～近代の日本海海運における物流の傾向は鉄道貨物の時代にも引き継がれ、その販路はあたかも海からの時代の「残像」のようにしばらく続いたのである。

VI. おわりに

本稿の内容は次のようにまとめることができる。

近世～近代の石見地方の窯業製品は、海上輸送に特化した海からの影響を受けた工場立地、製品形状、輸送方法に特徴がある。

石見地方の窯業製品のうち、近代の石見焼はおもに日本海沿岸へ、一方、石州瓦は西日本を中心に広範に流通し海から次第に内陸へ広がった。いわゆる北前船寄港地から面的に流通圏が拡大した日用品の石見焼に対し、石州瓦は近隣地域には面的に広がったが、遠方ではおもな湊とその周辺に点在するにとど

まった。

石見地方の窯業製品の流通の傾向は、戦後鉄道輸送中心の時代になってもあまり変わらず、日本海海運による海からの物流の影響が残った。

石見地方の窯業製品の分布を見ると、近世～近代の日本海海運による物流が、人々の生活圏の拡大とともに拡散したことが分かる。沿岸地域だけでなく、内陸地域の生活にも浸透していき、その物流の傾向は鉄道交通の時代になっても継続したことが指摘できた。

以上のように、本報告では、石見焼・石州瓦とも、現地調査を基にした流通圏の把握から論を進めたが、未調査地域も少なくない。悉皆調査とまでは行かなくても、未調査地域の調査継続が今後の課題である。また、他の製品、とくに庶民の様々な生活物資の流通との比較も今後取り組んでみたい。

（島根県立益田翔陽高校）

現地調査にあたり、300カ所近い各地の資料館、博物館、教育委員会などの皆様に大変お世話になりました。また石見焼陶器工業組合、石州瓦工業組合、島根県産業技術センター浜田技術センターの皆様には多くのご教示を頂きました。記してお礼申し上げます。

なお、本報告は日本学術振興会科学研究費補助金[奨励研究]「近代における日本海海運による石見焼陶器類の流通圏について」(課題番号24905001)、(公財)国土地理協会第14回学術研究助成「近代以降の石州瓦の流通圏に関する研究」などの成果を用いた。

[注]

- 1) 森 信美「石見の赤瓦及粗陶器の地理学的研究」地理学4-4, 1936, 227-239頁。
- 2) 木村辰男「粘土瓦工業の核心地域と市場」人文地理25-4, 1973, 1-31頁。
- 3) 阿部志朗「近代における石見地方の窯業製品の流通圏と日本海海運」日本地理学会発表要旨集No.83, 2013, 175頁。同「日本海沿岸地域にある近代の石見焼」民具研究148, 2013, 67-86頁。同「近代以降の石州瓦の流通圏に関する地理学的研究」((公財)国土地理協会編『学術研究助成報告書 第3集』(公財)国土地理協会, 2018), 63-84頁。
- 4) 鶴田真秀『石州瓦史』江津市文化財研究会, 1979。
- 5) 平田正典『石見粗陶器史考』石見地方史研究会, 1979。
- 6) 江津市文化財研究会『石見潟 第10・11号 特集 江津市の窯と窯業』江津市文化財研究会, 1986。同『石見潟 第13号 特集 石見焼(丸物と瓦)』江津市文化財研究会, 1988。
- 7) 久保智康「日本海域をめぐる赤瓦」(長谷川誠一・千田嘉博編『日本海域歴史大系 第四卷 近世篇 I』誠堂, 2005), 381-416頁。
- 8) 島根県古代文化センター『近世・近代の石見焼の研究』島根県古代文化センター研究論集17, 2017。
- 9) 榊原博英「近世後半から近代の石見焼」(佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学 第八卷』雄山閣, 2018), 209-243頁。
- 10) 島根県産業技術センター浜田技術センター

でのご教示による。

- 11) 他の陶器産地でも同様の赤茶色の製品があるが、これらに用いられる釉薬(例: 益子焼の芦沼石など)は1200℃程度で茶色になり逆に高温になると黒くなる。
- 12) 那賀郡共進會博覽會協賛會編『那賀郡誌』那賀郡共進會博覽會協賛會, 1916。
- 13) 前掲5) 255頁。
- 14) 前掲5) 111頁。
- 15) 中谷与(與)助『石見国商工便覧』川崎利吉, 1894。
- 16) 本稿では「はんど」に統一して表記する。
- 17) 粘土を10cm×1mほどの丸い棒状にし、それを「ろくろ」で回しながら成形する石見焼の独特の製法。甕の場合、下部を1/3作って半乾きにし、また中程1/3を継ぎ足して乾かし、また上部を1/3足してつくるため、注意深く見ると3段(小さい甕の場合2段)の継ぎ目が残る。
- 18) ギザギザの歯型をつけた竹串で横になぞった幅3cmほどの線状の模様。直線、波線、直線+波線の3種類があり、かつてはこれで甕のサイズを表していた。「すじ目」「め」とも呼ばれる。
- 19) 宮木慧子『陶磁器ワラ包装技術の文化史』吉川弘文館, 2015。
- 20) 江木俊雄・中島剛・前原清霞・高橋青磁「粘土瓦の耐凍害性と耐塩害性(第二報)」島根県産業技術センター研究報告49, 2013, 20-26頁。
- 21) 市街地などでも散見されるが出自が不明なので、本報告では明らかに石見焼の特徴を有するもの以外は除いた。
- 22) 長野県小布施町などでの聞き取り調査では、「新潟から運ばれてきた甕」と伝わっているが、千曲川(信濃川)を遡上したか、陸路で運ばれたかなど経路の詳細は未調査。
- 23) 柚木 学『諸国御客船帳—近世海運史料—上・下巻』誠堂, 1977。同『近代海運史料—石州浜田廻船問屋記録—』誠堂, 1992。
- 24) 近畿地方以西のおもに山間部に面的に広がっている赤瓦の多くは石見地方出身の瓦職人による現地生産による「石州系」とも呼べる赤瓦である。別の機会に論じたい。